



が議論されています。つまり3年もしくは4年の一般教養の授業を終えた総ての学生に、国際的に認められる学士号が与えられ、さらに2年の学問的研究を終えた学生には修士号が与えられるという方式です。同時に、職業学校や専門家養成学校が強化されるでしょう。この改革をおこなうことによって、一方で大学が経済的目的で専門教育を望む社会の需要に貢献することができ、他方で、ドイツの研究が国際的に高い地位を再び獲得する方向に向かう手助けをするのではという期待がかけられています。大学教育の再編と短縮に関連して、議論の内容は、教授の報酬を実績に応じて支払うような体制や、授業料の有料化に進んでいます。

それらの議論のすべてに、和解しえない対立があるの言うまでもありません。教育再編に関しては、現在のところ実用本位のアプローチがとられており、個々の大学や学部が比較的自由に新しいプログラムを試したり、学位の授与をしています。授業料の件では、かなり顕著なものとして、大学の普通コースの最初の期間の授業料無料が法的に保証されています。最後に、教授の給料制度の改革については、現在の固定給に付け加えるかたちで、特別な仕事や業績に対して報酬が支払われたなら、前進ありと考えられるでしょう。

改革、特に教育再編に関する議論は、日本研究にも当然影響を与えます。例えば、実際の考慮から、別の大学（通常日本の大学）との交換研究にあたり、従来必要とされた条件を満たし易くするために、ベルリン自由大学は、学士コースを設立することを予定しています。しかし、最初は現存する修士プログラムと平行して運営されるでしょう。



## 現代日本資料センター 電子ジャーナル情報

坂口和子

インターネットの爆発的な発展・普及に伴い、電子ジャーナルの数が急速に増えている。学術雑誌を中心とする電子化された情報出版流通機構は、この十年で実験段階から大きく実用段階へと飛躍した。現在インターネット上でアクセス可能な電子ジャーナルのサービスを提供している学術機関および出版社は、主だったものだけでも数百をかぞえ、日々増え続ける電子ジャーナルの正確な数字は把握できないほどである。しかしながら、短時間で急成長した電子ジャーナルも価格面ではまだ試験的な段階にあり、依然として電子ジャーナルだけの単独購読を認めていない出版社も多い。冊子体とのセットで無料、あるいはわずかな追加料金を加算する方式でアクセスを提供しているのが一般的だ。今回は、無料もしくは有料公開に先立ち期間限定で無料公開しているもの、あるいはまた学術図書館の利用者ならおそらく無料でアクセスできるであろうと思われる、お勧めの電子ジャーナル関係サイトを中心に紹介したい。

### JSTOR (Journal STORAGE)

(<http://www.jstor.org/>)

読者の中には、著名な学術雑誌のバックナンバーの所蔵確認をした上で書庫に潜ったものを目指す雑誌が欠号で、貴重な時間とエネルギーを無駄にしてしまったという経験がある方も多いただろう。JSTORはそんな時に是非チェックしたい重要な学術雑誌のバックナンバーのみを電子化するアーカイブ全文データベース。全米で90%を超える学術図書館がサイトライセンスを持つ。「雑誌の収蔵庫」(Journal Storage)をもじったその名前が象徴するように、JSTORは、現在多くの学術図書館が抱えている所蔵スペースの不足や欠号などの解消策として、1995年アンダー・メロン財団の支援を受けミシガン大学で開始された。学術的評価の高い学術雑誌の初号からおよ

そ最近二年くらい前までの全文を、OCR (Optical Character Recognition)のソフトを使用して網羅的に収録する。最新号の電子化ではないため電子ジャーナルの商業出版社との競合はほとんどない。発足から五年を経た第二期進行中の現段階で社会科学分野、殊に経済学及び歴史学を中心に約130誌が収録されており、日本研究関係雑誌では *Monumenta Nipponica*, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, *Journal of Asian Studies*, *Pacific Affairs*等の全文が創刊号から閲覧できる。画像方式による電子化のため引用文献リンク機能がないのが欠点といえる。

### HighWire Press

(<http://highwire.stanford.edu/>)

「最も先進的な究極の電子ジャーナルサイト」という折り紙付きのHighWire Pressは、シリコンバレーの中心に本拠を置く産学共同の電子出版プロジェクトとして注目を集めている。スタンフォード大学図書館・大学出版局・学会など非営利の学術コミュニティが一体となって、情報の電子化・インターネット化を商業出版社から独立して自由に研究開発するため1995年に発足した。HighWire Marketing Groupが販売と運営サポートを担当している。無料アクセスできる収録誌は多くないが(2000年8月現在210タイトル)、科学・技術・医学の分野で雑誌評価の一基準となるインパクトファクターの高い学術誌をカバーする。HighWireに収録されている雑誌はハイパーリンクで相互に提携しており、インターネット上で自由に互いの引用文献検索ができ全文入手も容易なのが特徴。マルチメディア(音声・画像統合)も可能な高次機能を持つ。

### UnCover

(<http://uncweb.carl.org/>)

Carl Alliance of Research Librariesが提供するUnCoverは、学術雑誌の目次速報およびドキュメントデリバリーを合わせて提供するデータベースのオンラインサービスだが、雑誌記事の目次検索だけでなく、ユーザー登録をしなくても検索結果を電子メールで送れるので便利だ。誌名によ



て異なるが、1988年以降の人文・社会から自然科学まで幅広い学問領域の約18,000誌をカバーしており、「民俗学研究」「日本史研究」「社会学評論」「情報管理」「史学雑誌」など、日本研究関係雑誌もおよそ270誌が収録されている。また、有料サービスとなるが、誌名やキーワードの検索式を登録しておけば定期的に最新目次情報が電子メールで配信され、その中で希望する論文だけをファックスまたは全文オンラインで入手することができる。支払いはクレジットカードによる方法がとられている。

### OCLC FirstSearch

(<http://www2.oclc.org/oclc/fs/fstitle/index.asp>)

電子図書館のパイオニアOCLC (Online Computer Library Center) のFirstSearch ECO (Electronic Collections Online) は、代表的な商業出版55社 (2000年8月現在) が提供する多種多様な電子ジャーナルを集めてFirstSearchのサーバーに乗せ、共通のインターフェイスで検索提供する代表的な学術雑誌全文データベース。JSTORと共に世界の学術図書館で利用されている電子資料としては最もサイトライセンスの普及率が高い。人文・社会系から医学生物系・理工系にいたる幅広い学問領域の、およそ2,500タイトルを超えるフルテキストを収録する。利用者にとってありがたいのは、検索対象となる約120,000タイトルに及ぶ雑誌のローカル所蔵調査が同じ画面で即座に確認できることだ。

### jake

(<http://jake.med.yale.edu/docs/about.html>)

欲しい雑誌が電子化されているかどうかを知りたい、という時に役立つのがこの無料データベースである。日々増加し続ける電子ジャーナルは正確で最新のリストを保持することが難しく、図書館員ですら即答できないことが多い。エール大学に本拠を置くjake (Jointly Administered Knowledge Environment) は、専門家でも分かりにくくなったメタデータを含む電子図書館資料の効率的な管理

とアクセスを促進するためのシステムとして開発された。現在サービスを提供している公的機関および商業出版社すべてのデータベースの情報が集められ (2000年8月現在194)、いわば「データベースのデータベース」として機能する。URLにもリンクしており、利用者の必要に応じカスタマイズされた電子ジャーナル管理システムを作ることができる。

### J-STAGE

(<http://www.jstage.jst.go.jp/>)

欧米の充実した電子ジャーナルの状況にやや遅れをとる現状への危機感からか、近年、日本政府も国の事業として電子図書館構築の支援を積極的に行なうようになった。科学技術振興事業団 (JST) が国立情報学研究所 (NII: National Institute of Informatics) との連携で開発している「科学技術情報発信・流通総合システム」(J-STAGE: Japan Science and Technology Aggregator, Electronic) は、科学技術関連雑誌の投稿、審査、編集、発信までの電子ジャーナル化機能を一貫して支援する共同利用システム開発プロジェクトである。国外への情報発信には、英語であることが望ましいという認識から、機械翻訳ソフトと組み合わせることにより、邦文記事を英文化することも可能な付加価値の高いサービスを目指している。これまでに収録された誌数はまだ少ないが (2000年8月現在20誌)、無料公開で国際競争力を推進するために学会・研究機関の参加を増やし、多種多様なジャーナルをここに集積させるといふ今後の展開が期待される。

学術雑誌目次速報データベース  
(<http://www.nacsis.ac.jp/sokuho>)

紀要、報告書、年報といった一般の流通機構にのらない無料の学術機関刊行物には、どこの図書館も大いに頭を痛めている。「タダほど高いものはない」の喩えのごとく、受け入れ・収蔵・アクセス提供といった管理面では莫大な費用を要するからだ。無審査の掲載論文が大半を占めるため、学術的意義を疑問視する向きもあるが、「紙の紀要から電子紀要へ」とい

う動きには図書館側からの積極的な協力を得てスタートした。国立情報学研究所の「学術雑誌目次速報データベース」は、これまで存在の確認が難しいという不満も多かったこれら学術雑誌への効率的アクセスに欠かせない探索のツールとして多に活用したい。学術雑誌目次速報データベースは、参加する日本の学術機関が自組織の研究活動や出版物のデータを分担入力方式で構築されており、NACSIS-IR (National Center for Science Information System - Information Retrieval) によって公開されている。本稿執筆時において参加する日本の学術機関・組織は既に500を超え、収録雑誌数は2,873タイトルにのぼる。

### 北海道大学付属図書館 Online Journals

(<http://www.lib.hokudai.au.jp/item/e-journal.html>)

Online Journalsは、北海道大学付属図書館職員によって作成・維持されている電子ジャーナルのリンク集で、邦文・欧文の電子ジャーナルの有無をチェックするのに便利。必ずしもフルテキストへリンクしているわけではないが、2000年6月の時点で収録された邦文誌および欧文誌の計8377タイトルを、それぞれ誌名でアルファベット順あるいは50音順で容易に探せるのはありがたい。該当文字をクリックすると、邦文誌は上記NIIの「学術雑誌目次速報データベース」にリンクし、また欧文誌は該当雑誌の目次情報が得られるURLにリンクする。さらにまたハイライトされたHOLDをクリックするとNACSIS WebCatにリンクし、日本国内の所蔵情報を得ることができる。

電子ジャーナルをめぐる状況はめまぐるしく変化しているが、学術図書館の雑誌収集とサービスのあり方、ひいては図書館の役割そのものも大きく変化している。よりよいサービスを提供するため、情報技術革命時代の新しい雑誌の今後に大いなる関心を注いでゆきたい。